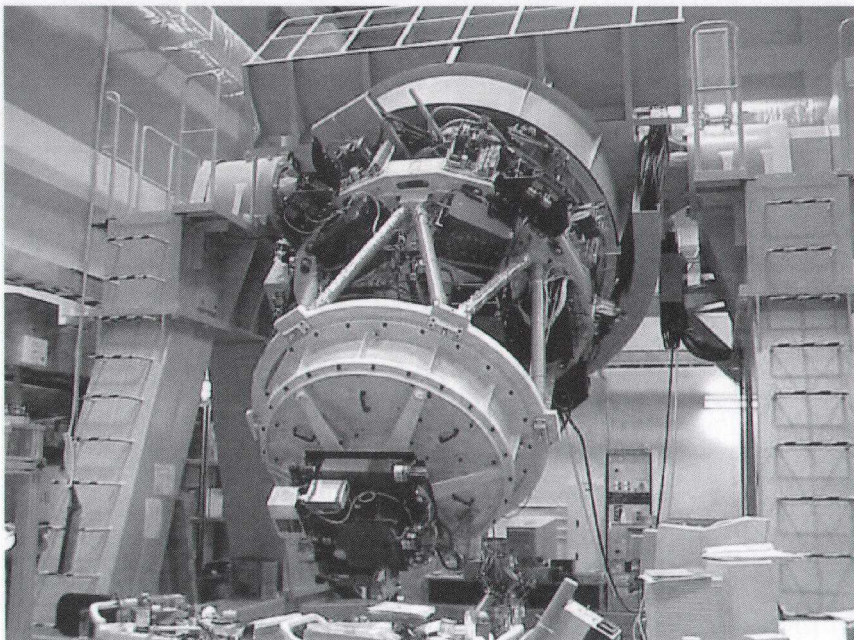


FOCAS はある晩突然に。 — ROAD TO MAUNA KEA —

そういえばその年の夏はとても暑かった。もう夜中の12時だというのに、何を求めてか唯1匹で鳴く蝉の声を遠くに聞きながら、僕らはFOCASの国内最終調整試験に追われていた。天井の高い三鷹の光学シミュレータ室は厚い壁の向こうの寝苦しそうなお夜とはうらはらに冷房がよく効いていた。ハワイ・マウナケア山頂の環境にできるだけ近づきたいという気持ちが必要以上に冷房の設定温度を低くしていたのかも知れない。

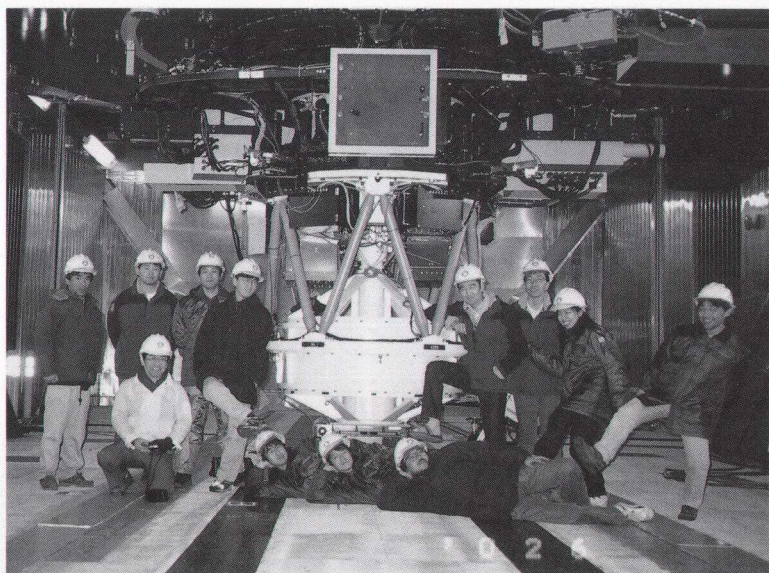
すばる望遠鏡が集める photon には多くの情報が内されている。その中から必要な情報だけを選びだし、僕らにわかる言葉に変換するのが観測装置だ。調整期間中、時には全く理解できない結果を返してくることもあり、その度に僕らは頭を悩ませた。なにせ、FOCAS はまだ生まれて間もなく、何が必要な情報かを知っているのか、それを正しく選び出しているのか、よそ者の photon が混じり込んでいないか、言葉に変換する時に正しい文法を使っているのか、いつも元気に働くことができるのか、そもそも photon をちゃんとつかまえているか等、その取得データを読む時には総てを考慮に入れねばならない。試験項目は膨大な数にのぼり、それを限られた時間内でこなすには、効率的にかつ慎重に根気強く試験を続けて行かねばならない。その



光学シミュレータを用いて調整試験を行う FOCAS

道が過酷であることは確かなのだが、僕はその夏の連日連夜の試験を続けて行くうちに喜びさえ覚えるようになっていた。それは、相手のいいところも悪いところも含めてその人となり日々わかっていく恋愛の始まりに似たものかも知れないし、1人の幼子がすくすくと巣立って行く過程を見つめる厳しくも優しい親の目に似たものなのかも知れない。

思えばその前年の夏も暑かった。サッカーのワールドカップの決勝で地元フランスがブラジルに圧勝した年だ。それはまだ FOCAS なんてほとんど影も形もなく、設計がやっと終わり、多くの要素について製作を開始し、それらについての基礎実験を繰り返していた頃だ。当時は設計と製作の谷間のような時期で、期待よりも焦りの方が大きかったような気がする。そんな前年の夏に比べれば今



FOCAS ファーストライト時のスナップショット

同じ光景を展げていた。彼らとは必要以上に干渉することもなく、別々の目標に向かって歩いていたが、ある種の強い連帯感を感じていたことも事実だった。それは、昼も夜もなく、平日も土日もなく続けられる光景だった。

その冬の間にミレニアムを迎え、FOCASは山頂に向かい、すばる望遠鏡に取り付けられ、そしてある晩突然にFOCASは目を開けた。数えればその日までに山頂に上げてから1ヶ月程が経っていた。しかしなぜかこの期間のことは非常に短かったような気がする。

は目の前に観測装置がまがりなりにも組みたてられ動いている、もうすぐ観測ができるという期待の方が大きかった。

そうしてそんな夏が終わる頃、FOCASは無事ハワイに旅立ち、僕らには心地よい達成感と疲労感が残された。

その年の冬が寒かったかどうかは覚えがない。日本の寒い冬から逃れるように1足先にハワイにやってきた僕らは、FOCASを載せた船便の到着の知らせを待ちわびながら毎日を過ごしていた。それは夏までの体力的な衰えを取り戻すには十分な時間であったが、あせりと期待が交互に去就し精神が疲弊していくのを待つには長すぎる時間だった。

FOCASは到着し、僕らはヒロの天井の高い光学シミュレータ室でまた今年の夏と同じような生活を送ることになった。山頂に上げる前にきちんと試験を重ねておくことがわれわれのポリシーだからだ。隣ではIRCSやCIAOも組立、調整を同じように行っており、僕らの少し前まではCOMICSも

このプロジェクトは他のすばる観測装置同様、あまりにも長期にわたって続けられてきた。その間には何故僕らは観測装置を作っているのだろうと自問自答を繰り返さざるをえないこともあった。その動機をいかに持ちつづけ緊張感を保ち情熱を高め続けるか、個人的にはそれこそがこのプロジェクトの大きな壁だったような気がする。そしてそれを越えることができたのは多くの人々の励ましと協力があつたからであることは間違いない。プロジェクト自体はまだ終わった訳ではなく、その動機は大きな転換期を迎え僕らはまた新しいスタート地点に立った。

もしかしたら、去年の夏あまり目にするのでできなかった夏の夜空に咲く花火は、このM82のH α フィラメントのように美しかったのかも知れない。そしてやがてまた暑い夏がやって来る。

柏川伸成 (国立天文台)